

仏師の娘

野村胡堂

一

「親分、こいつは変っているでしょう。とつて十九の滅法綺麗な新造が仏様と心中したんだから、江戸開府以来の騒ぎだ」

ガラッ八の八五郎は、また変な噂を聴き込んで来ました。

「何をつまらねエ」

「つまるかつまらねエか、ちよいと行つて見て下さいよ。京屋じゃ怪我^{けが}にして検屍を受け、日が暮れたら、お葬い^{とむら}を出すつもりでいるが、若い娘が仏様を抱いて、大川へ飛び込んでそれで済むと思いますか」

「京屋というのは、米沢町の京屋善八のことか」

「へエ——その京屋の下女、——と言っても弁天様^{べんてん}が仮に姿をやつしたような、お鈴という綺麗なのが、普賢菩薩^{ふげんぼさつ}の木像をし[、]かと胸に掻い込んで元柳橋からドブンとやらかしたんで。主人の善八が見付けて、引上げさした時はもう手遅れ、虫の息もなかったが、普賢菩薩の像だけは、確^{しつ}と胸に抱いて離さなかったというのは、いじらしいじゃありませんか。尤も普賢菩薩は女体^{にょたい}の仏様だから、こいつは心中にならないかも知れない」

八五郎はそんな事を言つてキナ臭い顔をするのです。

「娘の身投げまで、いちいち附き合つちや居られないよ。検屍^{けんし}が無事に済めば、それで宜いじゃないか」

平次は相変らず御輿^{みこし}をあげそうもありません。

「ところが、その普賢菩薩^{ふげんぼさつ}というのが大変なんで。木で彫つた仏

様には違えねエが、象の上に乗つかって居なきや、そのまま大おお籬まがきから突き出せそうな代物しろものですぜ。胡粉ごふんを塗って極彩色ごくさいしきをして、ニンマリと笑って居るんだが、その仇ひたっぽいことと言ったら――」

ガラッ八はそう言いながら、額ひたいを叩いて、舌をペロリと出すのです。よっぽど普賢菩薩に魅惑みわくされたのでしょうか。

「馬鹿だなア」

平次は取り合おうとしません。

「それだけじゃ種にならねエが、見ていた人の話に、お鈴が川へ飛び込む前、河岸かしつぷちで、しばらく男と揉み合っていたそうですよ。そいつが何うかして、お鈴を川の中へ突き落したんじゃありませんか」

「そいつは俺に訊いたって分らねエよ。――昨夜ゆうべは月が良かったのか」

「十五夜ですよ、親分。まだ涼みには早いが、あの辺あたりはチラリ、ホラリと人通りが絶えませんよ」

「そんな物騒な場所で、娘一人川へ突き落す奴があるのかな」

「だからあつしも変だと思うんで」

「それとも、普賢菩薩の木像に、何にか曰いわくがあるのかな。台座に穴でもあいて、そこへ古証文を隠しているとか何んとか」

「そんなものはありやしませんよ。台座は木目もくめがきちんとして、継目も合せ目もないし、仏体も鑿のみの跡が揃って、種も仕掛けもありません。何でも名人の作で、たいそう良いものだということがすが」

「フーム、面白そうだな。――その下女の身許は分っているのか」

「向柳原むこうやなぎわらの大工の熊五郎が請人うけにんで、お鈴の親は遠国にいるから、

葬とむらいには間に合わない。形見の品でも送ってやる外はあるまいということで」

「そいつは氣の毒だな。——とにかく氣を付けて見ているが宜い。若い娘が仏体を盗み出す筈はないから、何にかわけのあることだろう」

平次はそんな事を言うのです。手をつけるほど纏まとった事件ではないと思ったのでしよう。

京屋善八というのは、公儀御用の御紙所おかみどころで町人ながら見識が高く、巨万の身代しんだいを擁している上、骨董美術——わけでも仏像の蒐集家として知られておりました。本人はまだ五十を越したばかりの働き盛りですが、伴の善太郎は少し不肖で、多勢の奉公人は、番頭の久助が主人を助けて指図をしております。

綺麗な下女のお鈴は、どうして主人の蒐集うちの中から、極彩色の普賢像ふげんぞうを持ち出し、大川に身を投げることになったか、今のところ八五郎の報告だけでは何んにもわかりません。

二

それから十日ばかり経って、江戸はすっかり夏になりきった頃、ガラッ八の八五郎は、相変らず髻まげ節ぶしを先に立てて、銭形平次の家
に飛び込んで来ました。

「さア大変」

「とうとう来たのかい。今日あたりはお前が飛び込んで来そうな陽気だと思ったよ」

平次は何にか期待している様子でした。

「親分は聴いたんですか、あれを」

「聴いたよ。八五郎が京屋の近所を毎日うろうろしていることや、京屋の主人が年甲斐としがいもなくお鈴を附け廻していた話。それからお鈴の死んだのは唯事じゃあるまいと言った世間の噂をな。——お前が聴き出した話も、そんなことだろう」

「ヘッ、親分の前だが、そんなことであつしが飛んで来るものですか。今日の大変は他所よそ行の大変なんで」

「大きく出やがったな。いったい、どこの猫の子が首を縊くつたんだ」

「チェッ、いやになるなア。銭形の親分が鼻の先の殺しを知らないなんて」

「何んだと？」

「京屋の主人がゆうべ殺されましたぜ」

「何んだって早くそう言わないんだ」

「だから他所よそ行の大変だって言うんで」

「殺しに他所行も平常着もあるものか。来い、八」

平次はさすがに驚きました。十手を懷ろに捻ねじ込むと、いやに落着き払った八五郎を引つ立てるように、両国の方へ一散に飛びます。

「せっかちなア、親分」

その後から、喘あえぎ喘ぎ追って行く八五郎。

「こいつはうんと巧たくんだ殺しだ。現場を搔き廻さないうちに、ひと通り見て置きたい」

薄々京屋の様子を搜さぐっていた平次は、この殺しの奥に、容易ならぬものが潜んでいると睨にらんだのも無理のないことでした。

米沢町の京屋へ着いたのは、まだ辰刻（八時）少し過ぎ、家中はシーンと鎮まり返っておりますが、その静寂のうちに、鬱陶しい不安と、恐ろしい疑惑が孕んでいることを、物馴れた平次は嗅ぎ出しておりますた。

支配人の久助という五十男に案内させて、主人の死骸を置いてあるという、奥の一と間に通りましたが、その途々、廊下にも、庭先にも、戸棚の上にも、床の間にも、金仏、木像、古い、新しいの、釈迦も観音も薬師も弁財天も、大小あらゆる仏像が置いてあるのは、この道に興味の無い平次やガラッ八にも、一種鬼気の迫るものをさえ感じさせます。

集められた仏像は、――眼に触れる限りでは――高雅雄麗な推古仏は愚かなこと、唐土、朝鮮の古いのや、奈良、平安朝の芸術品、鎌倉期の雄健なものさえ一つなく、あるものは徳川期に入ってから、悪達者な職人の作った、低俗愚劣な作品ばかりで、金箔の厚いのと、容姿の艶麗な外には取柄のない仏像ばかり。これを金に飽かして集めた京屋善八の気持は、平次にもガラッ八にも分りません。

「親分、変な心持になりやしませんか。寺方の土用干し見たいで――」

「シッ」

「こいつを眺めていると、よっぽど罪の深い野郎でも成仏したくなりますよ」

「馬鹿野郎、黙って来い」

「へエ」

番頭の久助はそんなやり取りを聴えない振りをして、主人の寝

間の敷居際に立ちました。

「此処ここでございます」

平次と八五郎は一と足踏み込んでさすがに顔を見合せます。主人善八は床の中から抜け出したまま、脇差で喉のどを突かれて死んでいたのです。その思いの外なる悪相や、凄まじい血潮の氾濫はんらんはともかく、夜の物の贅沢さと、部屋の調度の見事さに平次とガラッ八は驚いたのです。

「見つけたのは誰だえ」

平次は手順を追うように訊きました。

「下女のお吉きちでございます」

「長おんなくいる婢か」

「いえ、お鈴が死んだ後で、房州から呼びました。出戻りの、四十を越した女で——」

お鈴で懲こりて、醜みにくい中年女を雇ったという心持が、久助の言外に溢れます。

「雨戸は？」

「一枚こじ開けてあったのは、そのままにして置きました。あとは戸袋へ入れてしまいました——」

縁側の外へ横にしてあるのはその雨戸でしょう。見ると敷居にも雨戸にも鑿のみを入れてこじ開けた跡があつて、曲者が外から入ったことは疑うたがいようありません。

「親分、大変な泥ですね」

畳の上に斑々はんはんとした泥足の跡。ガラッ八にそう言われるまでもなく、証拠は揃い過ぎるほど揃っております。

「脇差は？」

「主人の品でございます。用心のために、枕許へおいて寝たのが、却^{かえ}って災難^{わざわい}のもとでございました」

「なるほどそう言えないこともあるまいな」

平次は死骸の傍^{ほう}に抛^なり出してある蠟塗^{ろうぬり}の鞆^{さや}を取って、一応調べました。

「親分、傷は一つじゃありませんね」

ガラッ八は妙なことを言います。

「よく気が付いたな。さいしょ細刃^{あいくち}の匕首^{あいくち}で刺して、後で脇差で止めを刺したんだろう」

「どっちにしても、曲者が外から入ったに違いないとすると、物盗りでしょうか、それとも怨みでしょうか」

「さア、それは俺にも分らないよ。番頭さん、何にか紛失したものはないのかえ」

「何んにも失くなりません。主人の紙入も中の金までそっくりしておりますし、ここには大事な衣裳^{いしやう}も、金目のものもございません」

「それじゃ怨みか」

と、ガラッ八。

「人様に怒まれるような御主人ではございません」

「サア分らねエ。泥棒でなし、怨みでなしとすると」

ガラッ八がこんな分りきった掛合いをしている間、平次は部屋の中を念入りに調べておりました。

「番頭さん、こりや何んだえ」

手に取ったのは、素木^{しらき}に彫^ふった普賢菩薩^{ふげんぼさつ}像、台から仏体まで、せいぜい一尺二、三寸もあるでしょうか。毛程の顔料も用いない、



©2017 萩 柚月

全くのうぶな檜材ひのきですが、少し荒いタッチで、鑿のみの跡が匂うばかり。慈眼じがんを垂れた菩薩の顔は、少し離して眺めると、三十二相ごとく具備して、めでたくも気高き限りです、肩から胸へ流れる線の清らかさ。腰から膝へ、象の背へと移る起伏の優麗さ、あまりの見事さに平次も思わず感歎かなんの声をあげました。

「それは一向に存じません」

番頭ばんとうの久助は眼こすを擦ります。

「知らない？」

「へエ、一向に見かけたことのない御仏像でございます」

「この部屋には、不思議に仏像がない。廊下にも庭にも、あの通り幾百体となく仏像をならべて置くのに、この部屋には、床の間にこれが一体だけおいてあったのを、番頭さんは気が付かなかったというのか」

平次は重大な鍵を掴んだ様子です。

「へエ。——昨夜までそこに置いたのは、極彩色ごくさいしきの普賢菩薩様でございました」

「下女のお鈴が身投げするとき、抱いていたという仏像か」

「へエ。——旦那様はことにあの極彩色の御仏像がお気に召したようで、この四、五年はお手許から離れたこともございません」

「それが一と晩のうちに代っていたというのか」

「へエ——」

「親分、色を洗い落したんじゃありませんか」

ガラッ八が横から口を出しました。

「いや、極彩色のは仇っぽい仏様で、どっちかというのと嫌らしい出来だったというじゃないか。これは最初から素木しらぎだし、大変な良い出来だよ。素人しらうとの俺が見てさえ頭が下がるんだもの——おや？」

平次は仏像の下、台座の裏を覗いて見ました。

「何んかあるんですか、親分」

「銘があるな——琢堂たくどう——と読めるが、こいつは名人と言われた鎌倉の野沢琢堂だろう」

それはあまりにも有名な仏師でした。左甚五郎は彫物大工だいくですが、野沢琢堂は見識のある仏師で、関東地方に幾つかの傑作のこを遺しており、この普賢菩薩像なども、数ある琢堂の傑作の中でも屈指の数に入るものでしょう。

「親分、あつしにはだんだん分らなくなりますよ。こいつはどういう判じ物でしょう」

八五郎はどうとう投げ出してしまいました。お鈴の死と、京屋

善八の死を繋ぐ、何にか重大な事情がありそうです。

三

京屋の家族は、俵の善太郎たった一人だけ。これは人間がだいぶ甘く、二十二にもなっているのに、禿ちび鬚ほうきほどの役にも立ちません。

平次は一応会って見ましたが、要領を得たことは一つもなし。唯もうおろおろして、事件の成行を眺めているだけのことです。手代は友三郎、千次の二人。どちらも永年勤めて、何んの異心がありそうもなく、小僧の幾松は十一で物の数に入らず、下女のお吉は、四十二、三の中年女で、これは死骸を発見してひどく怯おびえている外に、何んの変哲もありそうはなかったのです。

「これだけかな」

平次は四方あたりを見廻しました。

「あとは出入りの職人や、通いの人足だけで、店にいるのはこれだけでございます」

久助は念入りに頭数を読みながら答えました。

「まだ、島吉どんが居るでねエか」

下女のお吉はお膳の数から思い付いた様子です。

「なるほど、あれも奉公人の一人だ。――庭掃にこしらきから荷拵おこしえ、使い走りなど、外廻りの仕事をしている、島吉というのがおります」

「どれだ」

「あれでございます。――いま土蔵の前を掃除そうじしている」

「――」

土蔵の前、同じ場所を何遍も何遍も掃除している、中年男の頭の悪そうなのを見て、平次はがっかりしてしまいました。

手代の友三郎は二十二、三。目から鼻へ抜けるような男で、店の評判を聴くと、綺麗な下女のお鈴と気が合っていたらしく、お鈴が死んだ後は、すっかり憂鬱^{ゆううつ}になつていふことも事実ですが、千次といっしょに店二階に寝ている友三郎が、夜中に脱け出して、主人の善八^{あや}を害めるといふことは考えられないことです。

もう一人の手代千次は、女とは縁の遠い辛抱男で、一面主人の氣に入っていたことも事実ですが、物に決断のない男で、人を殺すような性質でないことは、大番頭の久助が保証します。

小僧の幾松はまだ十一。——こう勘定して来ると、京屋の奉公人の中には、疑^{うたがい}を挟まれるものは一人もありません。

「奉公人の身許は皆んな確かだろうな」

平次は最後の念を押しました。

「それは大丈夫でございます」

「一番古い奉公人は誰だい」

「私で」

「一番新しいのは」

「お吉でございます。これはまだ七日くらいにしかありません」
「それから」

「私の次は友三郎で、その次は千次、幾松の順になります。お吉は一番新しくて、お吉より二日古いのがあの島吉でございます」

「あれでも役に立つのかな」

同じ場所ばかり掃^はいている島吉^{ろどん}の魯鈍^{ろどん}さには、さすがの平次もおどろいた様子です。

「主人も困っておりまして。身許は確かですが、あれじゃ、あんまり役に立たなさ過ぎます」

久助は苦笑いしております。浅葱あさぎの手拭ほおかぶを頬冠ほのかぶりに、少しせむしこわい顔で、栗色の肌をした中年男は全く醜みにくい昆虫のような感じがするのでした。

「八」

「へエ——」

「見当は付いたか」

番頭の久助を向うへ追いやると、平次はガラッ八に水を向けました。

「自慢じゃねエが——薩張さっばり分りませんよ」

「呆れた野郎だ。——俺にはだんだん分って来るような気がするが」

「それが分らないから不思議で」

ガラッ八は長んがい顎あごを撫でながら、臆面おくめんもなくこんな事を言うのです。

「それじゃ、彫物師の野沢琢堂たくどうのことを調べてくれ。何処どこに住んで、どんな暮しをしているか——本人が死んでいたら、子供たちのことを調べるんだ。宜いか」

「へエ——」

「俺はまだここに調べることが残っている。頼むよ」

「へエ——」

現場から遠ざけられるのが、ガラッ八の自尊心をほんの少しばかり傷つけたことでしょう。しばらくしばくしぶ洪しほっておりましたが、間もなくその姿を隠してしまいました。

平次はかなり大きい京屋の家の内外をこの上もなく、念入りに調べました。それから土地の下っ引を二、三人呼び出して、お鈴の身許を調べに八方へ飛ばせ、日が暮れる頃になってようやく引揚げたのです。

四

「親分、仏師の野沢琢堂は、去年の春鎌倉で死んでいますよ」

「間違いはあるまいな」

八五郎が報告を持って来たのは、それから三日目の夕方でした。

「鎌倉まで行って来たんだから、間違いはありません。――病気は中風、死ぬ三年前から身動きも出来ず、娘が感心によく世話をしたそうですよ」

「その娘の名は何んと言った」

「そこまでは聞きませんよ。――十八、九の綺麗な娘だったそう
で」

「だから馬鹿だつて言うんだよ」

「その代り倅の名は聞いて来ました、丈太郎というんだそうで。
この男は生れ付きの道楽者で、三年前親父の琢堂に勘当され、そ
れっきり行方知れず、生きていると三十二、三にはなるだろうと
いう話で」

「それっきりか」

「へエ――」

「娘と倅の人相は聞かなかったのか」

「そこまではね、親分」

「それが大事だったんだ。仕様のない奴じゃないか」

「へエ——」

平次はひどく不機嫌でした。が、その突き詰めた調子から、事件解決の鍵を握ったことを、八五郎は感ずるのでした。

その晩、下っ引の報告が一つ一つ平次の手許に集まりました。身投げをした下女お鈴の請人^{うけにん}は、向柳原の太工^{たいく}の熊五郎で、これは頑強にポンポン言っておりましたが、三日責め抜いた揚句、とうとう金を貰ってお鈴の請人になったということまで白状したのです。

「そいつはもうひと息だ」

平次が向柳原へ飛んで行ったことは言うまでもありません。

棟梁^{とうりょう}も江戸っ子だろう。金を貰って請人になったじゃ済むめえ

——何んだってあの娘が彫物師の野沢琢堂の娘で、義理があつて身許を引受けたと白状しなかったんだ」

平次の調子は自信に満ちて、突っ込んだものでした。

「親分、そんなことまで——」

大工の熊五郎は、蒼くなつてしまいました。

棟梁^{とうりょう}、お鈴さんは死んだんだぜ。それも身投げだか、人に殺されたんだか分つたものじゃねえ。——お前が本当の事を言ってくれさえすれば、お鈴さんの敵^{かたき}が討てるかも知れないんだ」

「恐れ入った、親分。いかにも皆んな申し上げましょう。お嬢さんも死んでしまったんだ。素姓を隠したところで何んにもなるめえ」

「そうともそうとも」

「お察しの通り、お鈴さんというのは仮の名で、あれは仏師の野

沢琢堂先生のお嬢さん、——お澄さんというんで」

大工の熊五郎が、琢堂の恩を受けて、それを忘れずにいるのを知って、熊五郎を請人に京屋に住み込み、何にか目論もくろんでいたことは疑いありませんが、それから先のことは、熊五郎も全く知らなかったのです。

「親分、お鈴が琢堂の娘だったとすると、これは一体どうなるでしょう」

ガラッ八の覚束おぼつかなさ。

「俺にも分らないよ。もういちど京屋へ行つて見よう。何にか見落したことがあるかも知れない」

平次も斯こうなるとかん、一つで辿たどる外はありません。

京屋はひと騒ぎ済んでようやく落着きを取戻し、足りないながら伴の善太郎が家督を継いで、久助の後見で、どうやらこうやら家業をつづけておりました。

「変りはないかえ」

ヌツと入った平次と八五郎。

「これは親分さん方、こちらには何の変りもございません。へエ」
久助は篤実らしく手を揉もみます。

「もういちど主人の寝間を見せて貰いたいが」

「へエ、どうぞ」

平次は奥の八畳に入って、念入りに雨戸を締めさせたまま、一生懸命何やら考えておりましたが、やがて、

「八」

「へエ——」

「曲者は主人を殺してから外へ出て、雨戸をコジ開けることも出

来るわけだな」

「？」

八五郎にはその意味が通じなかった様子です。

「外から入ったと見せたのは、曲者の器用な細工さいくだったよ。家の中の者がここへ忍んで来て主人を殺し、それから雨戸を開けて外へ出て、外から鑿のみで雨戸を開けて、泥足で入って来たとしたらどうだ」

「？」

「これだけ嚴重に戸締りして、印籠いんろうばめになっている雨戸を、外から曲者がこじ開けるあいだ、主人は何んにも知らずにグウグウ眠っている筈はあるまい」

「な、なーる程」

「曲者は家の中にいたんだ」

平次はとうとう事件の詐術さじゅつを見破ってしまったのです。

手代の友三郎と千次は店二階に寝ているので、これは疑いの外に置かれ、番頭の久助は通いで、その晩一步も外へ出ないと分つて、これも疑われる筋はなく、あとは小僧の幾松と下女のお吉ですが、一人は十一歳の少年、一人は四十過ぎの女で、これも雨戸の細工などを思い付く柄ではありません。

五

「あの島吉とか言う男はどうしたんだ」

平次はフト愚鈍ぐどんらしい庭男のことを思い出しました。土蔵の前を、水すましのように一箇所だけ掃はいていた男——その徹底した

無神経が何にか拵えもののように思えて来たのです。

「ゆうべ暇ひまを取って国へ帰りましたよ」

番頭の久助は何んにも気が付きません。

「国はどこだ」

「越後だそうで」

「八、困ったことになったぞ。——少し手ぬかりだったな」

「あの野郎ですか、下手人は」

「まだ分らないが、とにかく下男部屋を見よう」

二人は久助に案内させて、お勝手の傍かたわらの三畳を覗きました。が、中にはもう何んにもある筈はありません。

「島吉の請人は誰だ」

「向柳原の大工の熊五郎で」

「お鈴の請人じゃないか」

「お鈴が死んで間もなく入れました。そう言えば変ですね」
久助は今ごろ首を捻ひねっております。

「八、来い」

平次はもう飛び出しております。

「何処へ行くんで親分」

「お前遠っ走りは出来るか」

「向柳原へ飛ぶんでしょう」

「馬鹿、向柳原ならここから五丁ともありやしない。——島吉の後を追っかけるんだ」

平次はもう七三に尻を端折っております。

「越後まで行くんですか、親分」

「鎌倉かまくらだよ。まだ分らねえのか」

「へエー」

「あの島吉というのは、琢堂たくどうの倅せがれの道楽者さ——丈太郎とか言った」

「へエ——」

「ほとぼりがさめたと見て京屋を逃げ出したんだ。行先は分って居るじゃないか、親の墓のある鎌倉だ」

「なるほどね」

二人は半分は駈け、半分は駕籠かごで、その日のうちに鎌倉に入っておりました。

「ここですよ、親分」

八五郎が一度来た琢堂たくどうの庵いおりは、宵闇の中に堅く閉されて、人影がありそうもなく、四方は、松原で、人に訊くすべもなかったのです。

「ゆうべ京屋を出て、どこかで夜を明かせば、島吉の丈太郎が鎌倉へ着くのも早くて今夜だ。少し待って見ようか」

平次は松の根に腰をおろして、煙草入を抜きました。遠く波の音が聴えて、潮の香に煙草の匂まじいの交まじるのが、妙に八五郎の郷愁しゅうをそそります。

「大丈夫ですか、親分」

「大丈夫だ、ここより外に来る場所はない。——琢堂たくどう在銘ざいめいの仏像を置いて極彩色の仏像を持って行った男。——お鈴と入れ替って京屋へ来た男、——向柳原の熊五郎が請人で、阿呆あほうの振りをしていた男——こいつが丈太郎でなかった日にや、俺は岡っ引をやめるよ」

平次は自分へ言い聴かせるように独言ひとりごとをいいます。

「あつしに解らないことがあるんだが――」

「何んだ八」

「さいしょ細刃の匕首あいくちで主人を刺して置いて、後で脇差で刺したのはどういうわけでしょう」

「急いで匕首を隠すのは厄介だから、脇差で殺したように思わせたかったのさ。――あの時そこに気が付いて、下男部屋まきか薪小屋を捜したら、血のついた細身の匕首が見付かった筈だ。ぬかる時は仕様のないものさ」

平次はそう云いって自分の額を叩くのです。

「それにしても遅いじゃありませんか」

ガラッ八は大きく伸びをしました。

「どうかしたら、外へ廻ったかも知れない。又ぬかったかな」

「？」

「親父の墓へだよ、八」

平次は勃然ほっぜんと起ち上がりました。

近所の家を二、三軒当って、塚堂の墓はすぐわかりました。極ごく楽寺らくじの切通しを少し行いって、右へ登った林の間、二人はどんなに骨を折おってそこまで辿たどり着いたか。塚堂の墓の前に額ぬくずく黒い影は、平次とガラッ八が、諜しめし合せて前後から迫るのも知らずに居たのです。

六

「御用だッ、神妙にせい、丈太郎ッ」

まず飛び込んだのはガラッ八でした。

「親分——銭形の親分さん、逃げも隠れもいたしません。しばらく待って下さい。せめて三十年の不孝を、親父にしみじみと詫^わびて参ります」

黒い影は生^{なまじめ}湿りの土の上に双^{もろて}手を突きました。

「それじゃお前は」

平次も少し予想外だった様子です。

「江戸から来る途中、チラリと親分の姿を見て、観念して参りました」

「——」

「弁^{いいわけ}解じゃございませんが、ひと通り、こうなつたわけを聴^きいちゃ下さいませんか、親分」

丈太郎の島吉は宵闇の中に顔を上げました。

「聴こう。——俺にも分らないことばかりだ。皆んな話してくれ」
平次は相手の態度にすっかり気を許して、石の玉垣^{たまがき}の崩れたのに腰を掛けます。

「あの京屋の善八というのは、幾百となく仏像を集めておりますが、作の良し悪しも解らず、ろくな信心気もなく、大変な俗物でございました」

丈太郎は話しつつけるのです。

大俗物の京屋善八が、小格子の女郎を見立てるような心持で仏像を集め、そのころ関東第一の仏師野沢琢堂にも極彩色の女身の仏像を頼みましたが、琢堂は見識を重んじて何んとしてもそれに応じなかったのを、金と詭計^{きけい}とで納得させ、とうとう琢堂に取つては一代の恥辱^{ちじよく}とも言ふべき極彩色の普賢菩薩^{ふげんぼさつ}を作らせたのでした。

その後琢堂は、一たんの過ちで、俗悪妖艶な普賢像をこの世に遺すことを悲しみ、京屋善八に交渉して、何とかして買い戻そうとしましたが、さいしょ琢堂が受取った作料を倍にして返しても、仏像を戻してくれず、いかなる歎願も聴き入れないばかりか、かえって普賢像に対する愛着心を煽られて、朝夕自分の側に置いて、寸刻も離さないほどの溺愛ぶりだったのです。

琢堂は純真な芸術家らしい悩みを悩みつづけて、とうとう死んでしまいました。その遺言はたった一つ、『あの極彩色の普賢像を、何とかして取り戻して焼いてくれ——只と言っては、京屋善八は、還してくれないから、その代りに私が精根こめて彫った素木の普賢菩薩、これは琢堂一代のうちでも、五本の指に折られる傑作だ。これを持って行って換えてくれ』というのだったのです。

一人遺された娘のお澄（後のお鈴）は、さっそく勘当された兄の丈太郎を呼び寄せ、二人相談の上、素木の普賢像は当分兄が預って折を見ることにし、妹のお澄は、名を変えて身を包んで京屋へ奉公し、普賢像を引替える折を狙いました。

京屋の主人善八は、お澄のお鈴の可憐な美しさに心ひかれて、極彩色の普賢像を返す約束で無体なことを言い寄りましたが、いざとなると極彩色の普賢像を惜んで渡してくれそうもありません。お澄のお鈴は、たまり兼ねて兄と打ち合せ、ある晩極彩色の普賢像を盗んで逃げ出したところを、主人の善八に追われ、逃げ場を失って、大川へ飛び込んでしまったのでした。

その辺の事情は、善八もお鈴も死んでしまって、判然したことはわかりませんが、お鈴の態度や、善八の気風から判じて、恐ろ

しい悲劇にまで盛り上げられたことは疑いもなかったのです。

「妹が死んで三日目、あつしは下男に住み込みました。極彩色の仏像と、素木しらぎの仏像を替えて、親父の遺言を果せばそれで宜いわけですが、馬鹿な振りをして様子を見て居ると、妹を殺したのは、やはりあの善八しわざの所業だったことが分つて来ました。——あの親孝行な妹は、親父の遺言を守つて、野沢琢堂の名を汚したくないばかりに、自分というものを投げ出してしまったのです」

「——」
丈太郎は泣いておりました。墓の前の土がホトホトと音のするほど暫くは涙の顔も上げません。

「長いあいだ中風で身動きも出来ない父親を、手一つに看病かんびょうして、さんざんの貧乏と苦勞をなめた妹は、たった一日も、若い娘らしい、晴々はればれした氣持がなかったでしょう。——本当に可哀想な妹——その妹の敵を討ったのが悪いことでしょうか、親分」

「——」
「極彩色の仏像は親父の遺言通り素木しらぎと換えて置きました。——死んでしまった妹の命はどうしてくれるでしょう」

近々と響く潮鳴りの中に、丈太郎の島吉の鳴咽おえつが断続するのです。平次もガラッ八も、暫くは黙つておりました。

「よし分つた。幸いの闇、俺は何んにも見なかった。お前の顔も、姿も。——そしてこの俣江戸ままへ引つ返そう。お前もどこかへ消えてなくなるが宜い。俺の前へ二度と現れないようにしてくれ。丈太郎でも、島吉でも、俺は縛らずにおくわけには行かない。宜いか」

「親分」

「さア、帰ろうか八。夜道を少しでも引返して、藤沢あたりで泊るとしよう」

平次は塵^{ちり}打ち払って立上がりました。大地に崩折れて、ひた泣く黒い影を後に、その後ろに従^{したが}うガラッ八も、今晚ばかりは無駄口を叩く気力ありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十七年六月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>